

日の本に、三つの景色の一といふ、陸奥なる松島へ、今日思ひ立つ旅衣、著つ馴れにし
ふるさと 古郷を、跡に三春の駅路や

忽来の関は名のみにて、古りし昔を忍ぶ摺、文字もそぞろに名所を、記すすがに里人へ、
十府の萱菰七布三布、旅寐の日さへ浅香山、憂を白石白露の、萩の宮城野杖曳きて、おのが
心のまにまに、随岩寺へぞ著にける

黄金花咲く山遠く、ちがの浦辺へ立出でて、望む浪間に朝日島、春ならねども棚引きし、霞の
浦の朝ぼらけ

桜の名にし塩竈も、夏の茂りに御社を、埋む若葉の若浜や、涼しき風の福浦に、爰へよる

島すなどりの、海士には惜き女子島、友に語らふ恋の道
磯の苦屋の苦島に、汐馴衣濡そめて、立し筵の屏風島、隠せど浮名立つ秋の、夜の長浜も

長からで、沖の千島の痴話事に、名残雄島の霧隠れ、籬が島に又の夜の約束堅き石の浜

網引の唄の鄙めきて
雁金の山に便りの玉章を、松の黒崎冬の来て、積る思ひに身にしみじみと、雪の白浜小松島

あさる千鳥の大浜に、波の鼓の拍子につれ立舞ふ振の面白や

実にげにと亀と鶴崎に

松が浦島竹の浦、岸の小波打寄せて昔へ返る常磐津の、松の栄へぞ目出度けれ